ほない歴史通信
第５０号
2009.3.1

「ほない歴史通信」五〇号の発行に寄せて
～明日への地域づくりに向かって～

本年は水戸藩開藩四百年、四百年を記念して吉村昭氏の歴史小説『桜田門外ノ変』が映画化されます。昨年十一月映画化に備え、『桜田門外ノ変』映画化支援の会事務局長三上靖彦氏をはじめ映画監督佐藤純弥氏、脚本家江良至氏、多数の関係者が、桜田門外の変の実行隊長であった関鉄之介ゆかりの地を訪れました。映画制作をするために、関が隠遁生活をしていた桜岡源次衛門邸宅跡、蒟蒻会所跡、現桜岡末裔宅、袋田の滝、農兵の訓練・練習した高柴山、鉄之介が一時隠れていたと伝えられている高柴の岩穴などを視察しました。大子町（袋田、生瀬地区）は、『桜田門外ノ変』の映画のロケ地として大きく関わっています。

過日、二月十九日（木）余暇活用センターやみぞにおいて、『桜田門外ノ変』映画化支援の会主催による講座「地域のおもてなしと新しい観光の創造」が開催されました。私は「ほない歴史通信」の発行意図が「歴史と街づくり」に関わっている観点から「映画からはじまる地域づくり」に惹かれ、講座に参加をしたのでその一端を紹介しましょう。

日本観光協会事業部推進部チームリーダー鷲尾裕子氏は、国内の観光の今ー生活者目線を大切にー」と題し、「住民が素顔で、自分の町のいいところを見せる」「本当にいい街だと小さな情報等を提供してやる」のがおもてなしの心であると、その街の背景にある自然や食文化、歴史遺産を取り上げた観光づくりの先進地の取り組みなどを紹介しました。

全国の県や市町村の地域の観光振興に関わっている前田豪氏は「身近な観光地域づくりとおもてなし」と題し、観光地づくりは、ふるさとづくりである。観光地域づくりを一瞬の賑わいだけに終わらせてはならない。観光地づくりは汗を流し、時間をかけただけ長もちする等例をあげながら全国の優秀観光地づくりの例を紹介しました。

現在、大子町は過疎・高齢社会に直面しています、高齢化社会は、地場産業を衰退させ、過疎のはどめが難しくなっています。町は滝の全景が楽しめる新観瀑台の設置や「山田ふるさと農園」づくりなどの取り組みをとおして、社会的人口増加による地場産業の活性化に努めていますので、このたびの映画からはじまる地域づくりは、ロケ地観光地としての知名度やイメージアップ、地場産業への経済効果が期待できるものと思います。

最後に「ほない歴史通信」でありますが、一九九六年十二月に産声を上げてから十余年の歳月が経ちました。六頁内外の年四回の季刊発行のささやかな通信でありますが、水戸藩開藩四百年という記念すべき年に五〇号を発行することができました。その間、執筆者の輪を広げ、三〇号の節目には皆様方のご理解と協力を得て『大子風土記』を出版することができました。「ほない歴史通信」の発行意図については、創刊号と一〇号に述べられておりますように、編集委員一同「歴史と町づくり」をつなぐ情報紙として大子の町づくりに関与し、町づくりの一端を担えるよう続けていきたいと思っています。

（小澤）

佐竹氏と依上保

高橋　修

佐竹氏が常陸国に土着したのは、昌義の代とされる。一二世紀半ば頃のことであろう。土着といっても、当時の武士の生態は、一方で京での活動を欠くことはできないので、当主や一族の主だった者は、都鄙間を往復する生活であっただろう。

諸系図によれば、昌義は「佐竹」を苗字としているので、まず佐竹郷に本拠を据えたのであろう。間もなく太田郷の小野崎氏や那珂郡に勢力を広げる吉田氏（常陸平氏）との提携の上に、佐竹郷や太田郷とその周辺に、いくつかの拠点を確保していった。

佐竹氏に関する系図は、いくつも知られている。その中で、あまり詳しく検討されていないが、『続群書類従』所収、小田野和泉入道撰述の「御当家系図」は、昌義土着の様相を具体的に語る、興味深い一本である。

常陸下向にあたって、昌義は五人の子息をともなったという。嫡男で長男の忠義は、後に頼朝に殺害され、四男隆義が替わる。五男は義季で、『吾妻鏡』に「佐竹蔵人」として登場する。金砂合戦では頼朝軍を手引きし、金砂落城の原因をつくった。三男親義は、やがて信濃の所領に移ったようである。

ここで注目したいのは、次男の宗義である。信濃に移った親義を除けば、他の兄弟は佐竹を苗字としており、佐竹郷に居所を定めていたことが推測されるのに対して、この宗義は一人「依上」を所領としたことが、系図に書き込まれているのである。「依上」とはもちろん陸奥国白河郡依上保のことを指す。佐竹氏といえば、佐竹郷・大田郷との関係で、その成立が語られることが多いが、実は昌義段階ですでに、依上保をも領有していたことになる。

さらに興味深いのは、依上宗義の息子たちについての記載である。宗義の跡は長男義数が受け継ぎ、実名こそ記されていないが、次男は袋田、三男は町田、四男は大野、五男は綱懸、六男は山田を、それぞれ苗字としたという。袋田は、保内の袋田で後の南郷街道に沿い、そこから後の天下野街道に通じる道を分岐する。そして大野・町田・山田はいずれもその天下野街道沿いの集落である（綱懸のみ比定地不明）。特に大野は大子町外大野・内大野に当たり、そこからさらに棚倉街道に通ずる山道の起点となっている。

そのことから、昌義・宗義が、依上保を所領とし、その拠点を置いた理由を類推することができる。父子は奥州からの道が、常陸に入り南下するその入口を、まず押えようとしたのだ。そしてさらに街道沿いに一族を配置した。後に南郷街道・天下野街道・棚倉街道と呼ばれる、奥州と常陸とを結ぶこれらの幹線は、南下して大田郷・佐竹郷とその南方の地域で集約され、水戸へと向かう。平安時代のうちには額田・酒出も勢力下に組み込み、三街道のいわば南の出口にあたる地域も、佐竹氏は押えている。

東北・北方の富を西国にもたらす列島の重要幹線は奥大道である。これを白河から分岐して南下し、常陸に至る道は、「依上道」と呼ばれ、奥大道に准ずる幹線として重視されていた。この道は、さらに南で、東海道と結び内海世界に至る。「依上道」がいずれのルートを指すのか、断定はできないが、おそらく右に取り上げた、依上保を起点に進入が可能な、奥州と常陸を結ぶ街道の総称として用いられたものと思われる。

新羅三郎義光の時代から、すでに奥州とは密接な関係を維持していたこの一族の常陸定着は、「依上道」を押えることにより実現されたものといっても過言ではない。

（笠間市在住）

水戸藩医
原南陽と大子地方

吉成英文

原南陽は江戸時代中期に水戸藩に仕えた医師である。藩医として藩主、藩士の病気や怪我の治療に当たりながら弟子・門人の育成に努め、その教育を受けた者は水戸領内外を合わせて二百人以上に及んでいる。加えて実践的な医学書を数多く著して臨床現場に身を置く医師たちの医学・医術の向上を図っている。

そのなかには現在の大子地方からも医者の卵として水戸に出て原南陽の塾に入門・修業し、やがて「業なりて」地元に戻り、所謂「郷医」として地域の医療活動に専心従事した医師が十二名いたことがその門人録から知ることができる。紹介しよう。

(入門年月)	(氏名)	(出身地)
安永五年四月	志賀玄茂名良平	久慈郡下野宮村
安永五年十月	大森玄雄名伯雄	久慈郡町付村
安永九年二月	皆吉玄察名胤叙	久慈保内大子人
天明二年八月	吉成玄意名元恭	久慈郡相川村
天明六年二月	桜岡立啓	久慈郡池田村
寛政六年三月	藤田玄丈名之春	久慈郡上金沢村
寛政七年八月	大森玄素名敦善	久慈郡町付村、玄雄の子
寛政十二年三月	鶴川友的名貞	久慈郡相川村
寛政十二年三月	吉成正伯名升盛	久慈郡左貫村
寛政十二年十月	志賀玄意名孟彪	久慈郡下野宮村、玄茂の子
享和元年九月	斎藤立元名善	久慈郡(外)大野村
文化二年二月	吉成玄伯名祐之	久慈郡左貫村、正伯の子
文化七年三月	大森玄亀	久慈郡町付村、玄雄の子

この門人録から分かるように入門者の中には親子二代にわたって南陽の教えを受けた者もいる。

天明二年(一七八二)三月二十四日、南陽は門人で大子村住の郷医皆吉胤叙の依頼をうけて大子村に隣接する冥賀村の富農菊池忠左衛門を往診するため水戸を出発している。南郷街道を久慈川に沿って遡り頃藤村川下で久慈川を渡り舘集落をぬけて大沢村塩沢新田集落で民家に宿をとっている。

翌朝早くに宿を発ち洞坂峠を越えて槐沢沿いに山道を下り大子村小久慈集落を経て皆吉家に到着している。ここでは挨拶休憩もそこそこに冥賀村の菊池家に赴き忠左衛門を診察しているが、忠左衛門の病名、症状、治療方法等についてはその往診録『紀遊保内』には一切書き記していない。恐らくは緊急性を要しない慢性病か進行性の疾病でもあったのかも知れない。

話は前に戻るが、洞坂峠から槐沢沿いの山道を下る時、当時水戸城下辺の学者・文人間で珍重されていた小久慈硯の原石を拾うため沢に入り水濡れの石を三個ほど拾い上げたが、そのうち一個は大きくて持てあまし、小さい石二個を持ち帰ったことを書き留めている。この時に持ち帰り硯に彫られ南陽に愛でられたであろう小久慈石の硯は子孫の家には残されていない。

それにしても幾ら門人の要請とはいえ水戸から保内大子在の冥賀村までの往診の道すがら、帰りではなく行く途中の石拾い、そして診療、それが済んで皆吉家での酒肴による歓待を受け宿泊している。翌日には水戸へ帰るに際しては大子村から舟下りしながら袋田村迄行き、そこで一旦舟から降りて徒歩で袋田瀑布や付近の山々や茶店等を物見遊山している。その後再び船に乗ったり街道を歩いたりして水戸に戻っている。

ここで注目しなければならないのはその行動記録である。藩医として多忙ななか幾ら藩庁の許可を得た往診とはいえ一人の患者の診療ためとはいいながら出発から帰着までの見聞と感想を詳細に書き留めて今に残してくれたことに敬意を表したい。

清河八郎と水戸の志士

桜岡　滋弥

ＪＲ陸羽西線清川駅で下車し、国道四七号に沿う旧道を線路沿いに南にすすみ、清川小学校角を右折した道路沿いに建つ財団法人清河八郎記念館。

平屋モルタル造りの記念館に入り、陳列された彼の遺品を見てまわったとき、策士、黒幕、謀反人等々のマイナスイメージがつきまとう清川が、実はそれらは作られた不評ではないかとの思いがよぎった。

陳列されている彼の遺品は、山形県文化財指定五十点、清川町指定有形文化財が三十八点、それらの多くが、学問と武道を並行して説く、いわば文武両道の著書である。

例えば、芻尭論語篇六冊、同学庸篇一冊、同文道篇一冊、同武道篇一冊、彼の兵学講演録、道中記としての楽水楼記、望月楼記他、漢詩、和歌の書幅等である。

清河八郎は果たして悪党か否か。

彼が少年時代から暗殺されるまでの彼自身の日記旦起私乗西遊草から、彼の生涯と水戸の志士とのかかわりを探ってみる。

清川八郎は天保元年（一八三〇）十月、現在の山形県田川郡清川村（註・天保郷帳によると同村石高五六三石、庄内藩領）郷士齋藤豪寿、母三井亀（鶴岡城下生）の長男として生まれた。

齋藤家は代々酒造業を営み、大地主、大庄屋、父は郷士、酒田の本間家とその財力において並び称されたという。

八郎が自由奔放に行動ができたのは、裕福な生家故のことであろう。

彼の幼名元司、長じて正明、字士興または芻尭子と号し、諸国潜行中は日下部達三と称していた。

十歳のとき、鶴岡城下に出て清川郡司なる学者の門人となったが、蕩佚（ふしだら）、娼楼に登り…などの所業が発覚、家に戻される。十八歳になり今度は家出をして江戸へ。運良く当時一流の儒学者東条文蔵（一堂）の塾瑶池に入門することができた。

師一堂は上総生まれで豪農の二男、温厚な人柄で知られ、時の老中阿部伊勢守正弘には昨今の西洋事情を説き、海防論者でもあった。（註・一堂の子孫が現在東京で結婚式場東条会館を経営している）。

瑶池（仙人のいる世界の意）塾は神田お玉ヶ池（註・現在の東京神田松枝、神田川にかかる和泉橋付近）に在った。

門人約三千人、佐久間象山、頼三樹三郎なども門人である。

この塾に隣接していたのが千葉周作の道場玄武館で、清河はしばしば同道場の稽古を見学し、千葉氏の一刀流は而して実に都下の剣の魁師なりと記している。

瑶池塾は師の文蔵が病死すると千葉道場が家屋を買う。文蔵の息子方庵は転居し、赤羽川岸通り（註・東京港区）で雙柳舎を開いた。

清河八郎はかつて故郷鶴岡城下で伊藤弥平治なる剣客に弟子入りをしたことがあったが、江戸では千葉道場に入門した。

千葉周作「寛政六年（１７９４）～安政二年（１８５５）」は生家が南部藩領内盛岡で、北辰流の祖千葉常胤の技と、師中西猪太郎の一刀流とをあわせ、北辰一刀流をあみ出し、門弟は数百人に及んでいる。

水戸藩主徳川斉昭は彼を百石でめしかかえ、彼は馬廻役、中奥と出世した。（註・中奥とは殿様の私用を代役する。家

禄百石は現在の大子町大生瀬村年貢米から出ている)。
周作の長男太郎は早世、代わって安中藩脱藩の海保帆平「文政五年(1820)〜文久三年(1863)」が後を継いだ。
清河は安政五年に北辰一刀流免許を授かっているが、嘉永四年(1851)にすでに取得したとしている。現存しているのは安政五年の免許のみである。
彼は幕府直轄の学問所昌平黌にも入門したと前述旦起私乗は伝える。このころ清河八郎を称しはじめた(註・安政元年)
安政二年(1855)十月の江戸の大地震でやむなく帰郷し、父が十一人扶持、郡代支配を仰せつかる生家の酒造業を手伝い、著述にはげんだ。
その一方城下の遊郭でお蓮という女郎を身請けし妾とし、母亀が諸国見物するのに付き人にしたりしている。

安政六年再び江戸に出た清河は千葉道場の近く(註・現在の東京神田岩本町)に塾を創り、文武指南所と名づけた。
彼はのちに幕府が公募した浪人募集にも関与していて、従って幕府擁護の立場にいるようにも思えるが、彼が道場内にもうけた虎尾の会というグループのメンバーをみると、薩摩の伊牟田尚平、樋渡八兵衛、益満休之介などみな攘夷論者で、やがては水戸の志士との深い交流がはじまる。
万延元年(1860)一月、清河は同志伊牟田尚平と連れだって赤羽橋(註・現在の東京港区古川にかかる橋)付近を歩いている時、アメリカの通訳官ヒュースケンが日本人の護衛をつれて通りかかったのを一刀のもとに切り捨てたため、公儀から追われる身となった。
その時の清河の人相書は
一、出羽国清川村出生
一、歳三十二、若キ方ニ相見候
一、中丈中肉
一、顔長キ方
一、色白ク、月代濃ク、タダシ逃亡ノ節総髪ヲ半髪ニイタシ候(「越後より鶴ヶ岡出ル役書留、清河八郎事績」による)

後に幕府の追手がせまっていたが、かねてからの知人で、幕臣山岡鉄舟から、貴殿は構い無し、つまり無罪との連絡があった。この裏には水戸藩士住谷寅之助の働きがあった。といわれている。
清河はかつて水戸におもむき、住谷寅之助、下野隼二郎、山口徳之進らと会い、皆俊士なり、終日酒をくみ、ともに義気を聳動せんことを約す、と潜中記にも書いているように、水戸藩士たちとの交流もあった。これは彼がいわゆる安政の大獄の原点ともいうべき水戸家対幕府対立に関心があったことに他ならない。攘夷論で学者肌の清河は、思想を同じくする薩摩人、山岡のような幕臣、尊皇敬幕の水戸人と交流し、いずれが正かに迷う。
水戸が桜田門外の変で時の大老井伊直弼を殺害し、その危機意識から、幕府は政治総裁松平春嶽の命令で、文久二年十月、浪士募集のお触れを出した。清河は諸国を遊説し、浪士を集めることになる。講武所、田安家、小普請組などによって作られた組織下、清河は利用されたのである。
応募してきた浪士は約百五十名で、博徒、無宿人、農町民など様々の稼業をもつやからである。例の近藤勇、土方歳三、芹沢鴨もこのとき採用された。
この隊の本部は京の壬生新徳寺におかれる。
清河はここで大演説をした。「我々は尊皇攘夷のための隊

で、その目的のために命をささげてもらいたい」。
山岡鉄舟は賛同、浪士隊の創設に関して勅宣まで得ている。
これを知った幕府政治総裁松平春嶽は激怒し、清河を謀反人としたが、公に彼を処断できない。
清河はさっさと浪士らをひきいて江戸に引き上げた。後に残った二十四名の浪士が新撰組で、公儀のために命を投げうつとのスローガンのもと会津松平家京都屋敷の支配下となった。
清河は江戸へ連れてきた浪士と水戸の志士とを合体させ、折から朝廷が幕府に対して、水戸家を中心として攘夷を実行せよとの命令が出ていたのに呼応しようとしたのである。
浪士達は伝通院付近（註・東京文京区小石川）にあった山岡鉄舟邸で生活することになる。
ところで、清河八郎の妻お蓮は、清河がヒュースケン暗殺事件では無罪となった事を連絡不十分で知らされていない庄内藩江戸屋敷（註・東京千代田区大手町）に捕えられ、清河の行方を言えと拷問された。
その後お蓮は伝馬町の獄に送られ獄死してしまうが、牢内は金子なければどうにもでき申さず云々と、いわゆるツルがなければ取調がきつくて耐えられない旨の手紙をしたためている。
清河はお蓮に感謝し清林院貞永香花信女との戒名を贈った。
文久三年（１８６３）四月、上ノ山藩（註・時の藩主松平信庸（のぶつね）、譜代）江戸上屋敷（註・東京港区、麻布十番に至近）家老金子与三郎に招かれた彼は、他藩家老の招待何事かと思いながらも羽織袴の正装、人目に付かぬように陣笠をかぶり居所を出た。めざす上ノ山藩江戸上屋敷は、彼の居所からは南方、芝増上寺の広大な境内が目印の大名屋敷が立ちならぶ一角にあり、古川が直角になる池、一ノ橋ぎわにある。
日暮れに彼は目的の屋敷に到着、家老金子与三郎は挨拶もそこそこすぐさま酒の用意をさせた。酔わせて殺す計画だ。
生家が造酒屋（つくりざかや）でもともと大酒飲み、酒乱の気がある彼であった。つがれるまま大杯を飲み干す。
人に支えられなければ歩けないほど酩酊し、陣笠をかぶり、右手に鉄扇という姿で上ノ山藩邸を出た彼は、古川にかかる一ノ橋から二ノ橋方向へ川ぞいに歩き、かつての火災で家屋が焼失し草原になっている暗がりまで来た時、武士数名に取り囲まれた。幕府見回組の武士達なので清河は顔見知り、まさか彼らが自分を襲うとは思ってもみないで声をかけた。彼等は清河の背後と前方に立ちふさがった。背後の一人が抜刀し清河の後頭部に斬りつけた。
彼は刀の柄に手を掛けたが、前方の一人に胸を突かれ、彼は倒れた。
そこを他の刺客たちがそれぞれにトドメを刺した。
刺客達の頭は幕府見廻組の佐々木只三郎で、京での坂本龍馬暗殺も首謀者は彼と言う。
清河が殺された後、彼が雇っていた浪士は庄内藩お預けとなった。
清河の首はとりあえず伝通院に安置、後に故郷へ位牌が戻り、歓喜寺に安置された。戒名は清秋院、明治になり正四位が贈られ、維新の功労者の一人となった。
尊皇攘夷と佐幕との思惑の中で、彼は謀反人と酷評されたが、それなら幕臣山岡鉄太郎の立場はどうだったのか。
ところで、テーマである清河八郎と水戸の志士たちとの交流は、清河八郎記念館でもその名を見る事ができる。

この稿では紙面の都合上次の三名にしぼり、それぞれが清河のために書いた歌をかかげる。

武蔵野にしげるしこ草払いてし
後こそ幾葉四方の若草　　源　信頼（住谷寅之助）

あかねさす我が東（ひんがし）のますらをは
日の大国のかすみなりけり　　久継（金子勇二郎）

きょうよりはかくのみならで大君の
醜のみ盾とならましものを　　東海　與（住谷七之允）

清河八郎の生家齋藤家の屋敷跡は現在駐車場になっており、大庄屋、酒造業、そして郷士であった齋藤家をしのぶものは何ひとつない。

八郎は長男。次弟熊次郎、三弟熊三郎は若くして病死、妹辰が順次郎という婿をむかえて齋藤家をつぎ、夫婦の長男治兵衛正義が明治から大正のはじめにかけて何期か村長をつとめた。

この治兵衛正義夫婦には六男四女の子女がおり、現在、清河八郎記念館々長をつとめているのは長男清明の子息清氏である。なお四女栄子は作家柴田錬三郎の妻となった。

いま、清河八郎の遺蹟をまもるのは館長清氏とその家族のみ、他の縁者が訪れることはまったくないという。

（大子町袋田在住）

関鉄之介の歌碑

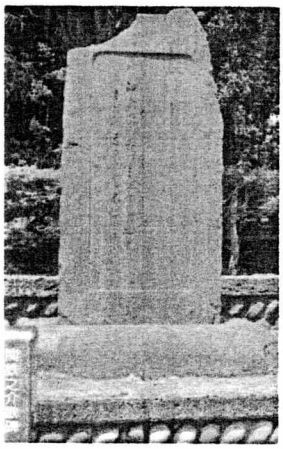
袋田温泉思い出浪漫館入り口近くに、国道四六一号に面して水戸浪士関鉄之介（一八二四～一八六二）の歌碑がある。

河鹿鳴く山川水のうきふしに
あわれははるの夜半にもそしる

この歌碑は、昭和十三年（一九三八）の秋、農工銀行頭取江幡新によって建立されたものである。歌碑の題額は田中光顕が書き、和歌は鉄之介の真筆、碑の裏面にある鉄之介の顕彰は、当時一橋商大教授、書家であった峰間真吉が撰文している。

関鉄之介は、文政七年（一八二四）水戸上町馬喰町に生まれた。弘道館に学び、斉昭のもとで郡方勤めとなり、郷校設立や農兵の組織化に努力をした。水戸学の影響を受けた鉄之介は、尊皇攘夷運動や改革派の拡大に努め、安政の大獄が行われると高橋多一郎や金子孫二郎とともに脱藩し、安政七年（万延元年）旧暦三月三日大雪の江戸城桜田門外で水戸浪士一七名に、薩摩藩士一名が加わり徳川幕府の大老井伊直弼を暗殺した。

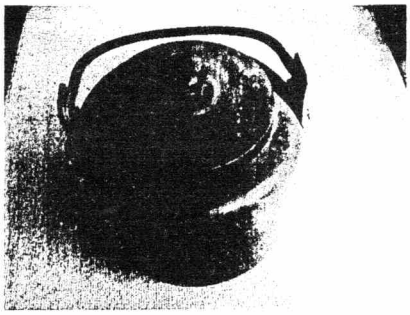
現場で指揮官を努めた鉄之介は、大老暗殺後は生き延び、関西方面に潜行したが、その後引き返し常陸国袋田村豪農桜岡源次衛門宅に匿われた。しかし、捕縛の手がのび、袋田を去り文久元年十月越後（湯沢温泉）でとらえられ、翌年四月五日江戸小伝馬町におくられ処刑された。享年三十九歳であった。



河鹿鳴くの歌は、関が袋田桜岡家に潜伏中に詠んだ歌である。（小　澤）

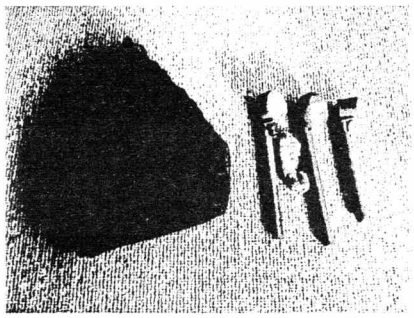
関鉄之介の隠遁生活地とゆかりの遺品
～ 袋田での生活を中心にして～

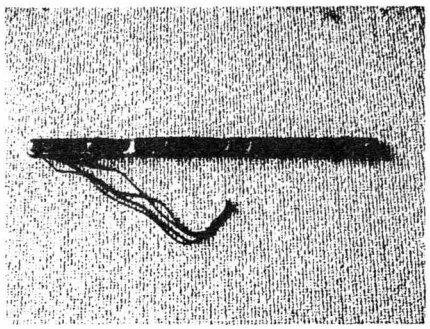
桜田門外の変の実行隊長関鉄之介は、事件後、変名を用い町人に変装し、関西方面に身を隠したが、やがて東海道、江戸を経て常陸国袋田村の桜岡源次右衛門を頼り、同邸宅内の蒟蒻会所に身を潜めた。彼には持病があり、病気と闘いながら隠遁生活をしていたが、追っ手が迫り、袋田の地を離れ、文久元年（１８６１）１０月２３日越後（新潟）の雲母温泉で捕らわれ、翌２年江戸の獄舎で処刑された。



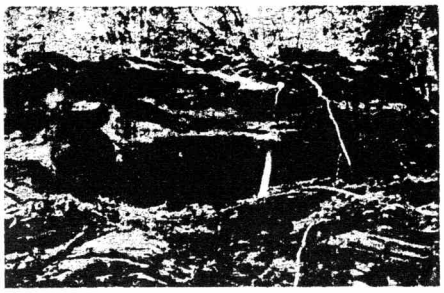
大老暗殺の軍資金を入れ、鉄之介に届けられた薬缶（薬缶の下に２００両、上に赤飯をのせたという。重箱説もある。）

鉄之介が匿われていた桜岡邸





鉄之介が隠遁生活中に使用した硯と煙管、笛



鉄之介が一時身を隠し,生活をしたと伝えられている高柴大沢の洞窟

八溝石あれこれ

安藤政蔵

八溝石は、八溝山の南麓の土中と八溝川から産出される。砂岩、頁岩が原石で硬質で水になじむ。形は遠山、島形、岩潟、溜まり、滝と頗る変化に富んでいる。色は黒、蒼黒、赤褐色で鉄サビを帯びたものもあり、雅趣豊かな石である。

夙に名声高く、昭和四年、地元旅沢家所蔵石は太田町（現常陸太田市）で天覧に供されている。

昭和三〇年代後半の石ブームで愛好家が激増、多くの人が八溝を訪れて山や川で探石し、大量の石があげられた。八溝石は取り尽くされてしまったと嘆く人もいる。しかし、まだまだ佳石は土中と川底に眠っている。その証拠に、地元の愛石会員や愛好家は次々に見事な石をあげている。

一、八溝石の出産地・特色

八溝石はどこから産出されるか。八溝山石は山頂や中腹ではなく南山麓、上野宮の蛇穴・磯神付近山林の土中から産出される。八溝川石は蛇穴・磯神の八溝川を挟む左右の山壁から川に転げ落ち川ずれしたもので山石と同質である。

八溝石は、硬砂岩に石灰岩が食い込み永い年月を経て地下水に石灰質が融け、硬い砂岩だけが残ったものである。変化に富んだ山形、島形、溜まり、洞窟等になり、吸水性保水力があり、その濡れ色は抜群である。

二、八溝山石・八溝川石・カナゴウ石

八溝山石は概して荒れ肌で峻険、直線的で県民性に似た無骨さが特色である。また一方、わび、さびといった枯淡の味わいを持つ痩せた石もある。山石は水盤に据えて観賞するのがよい。

八溝川石は、蛇穴・磯神付近の山壁から転がり落ちたもので急流にもまれ擦られ川ずれしている。川ずれにより石肌は適度ななめらかさときめの細かさが出て見所となる。連想が湧いて楽しめ、飽きがこないのが特色といえる。この石は、水盤でも台座でも観賞できる。

八溝川の本流と支流から、ねずみ色で硬質、肌がボツボツしている石が出る。地元では、硬いところからカナゴウ石、肌の様子からアワ石と呼んでいる。八溝石として認めない人もいるが、持ち込めば古色がでる雅趣のある石である。

三、山での探石

八溝山石は山中に埋まっており、山は私有林で掘り出す際に杉の根を傷めてしまうので、入山禁止になっている。山に入るには山主の許可が必要で、知人や縁故のある少数の人しか入れなかった。そのため、以前は人目を忍び盗掘する人も結構いたとのことである。それが、数年前に縁故やコネがなくとも入山料を納めれば入れる山が登場し、熱心に通い続け佳石を掘り出した人がいるということを耳にした。私も二年前に山主の案内で入山、探石した。雑木山で根が張っていて穴を掘るのに難儀した。やっと掘り出したものの土に覆われ塊状態で良否は分からない。鋤等でざっと土を落としてものになりそうな石を持ち帰り、細部に食い込んでいる土を取り除く。これは、とても根気がいる作業であるが楽しい作業でもある。山石を掘り出すには、バール、スコップ、鋸、鉈、鋤等の用具が必要である。

四、川での探石

時期は渇水期がよく、六～八月は避けた方がよい。探石地点は中、下流で、探石人数は三～四人がよい。曲がりのある瀬や淵、川原の砂地や草地を丹念に探すこと。根四、感三、運三である。

五、町内の愛石団体

大子町内には、町付に八溝石愛好会（益子政雄方）、池田に常陸大子水石会（照沼翠方）がある。

（常陸太田市在住）

光圀公と龍泰院

出村尚英

私が住する龍泰院は、東向きに建てられている。おかげで正面に月居山の双耳峰を望むことができる。山頂の平坦地はかつて月居城があった場所で富士山を遠望することができる場所でもある。月居山は二つの峰からなり、その間の鞍部が昔の月居峠であった。江戸時代にはこの峠を越えて多くの人や物資が行き来したという。水戸黄門漫遊記でおなじみの徳川光圀公もここを超えて大子地方へ巡村にやってきたという記録がある。その光圀公が月居山や袋田の滝を詠みこんだ漢詩を残しているので紹介する。

偶過龍泰院信筆漫簡種月師

寂寞禅房遠市鄽　月居突兀劈旻天
洒衣曹洞長流水　濯足袋田千丈泉

この漢詩は、元禄八年（一六九五）秋、大子村の永源寺を訪ねた後、龍泰院の山門を叩くにあたり、当時の住職種月師に呈したものである。この漢詩の解説に入る前に光圀公と種月師、当時の時代背景について述べてみよう。

種月師が光圀公と対面するのはこの時が初めてではない。前年の元禄七年、光圀公が将軍綱吉の命で江戸に上がっていたときに種月師は訪ねて歓談し、その時五言律詩の一首をはなむけにもらっている。その当時は綱吉が発令した悪名高い「生類憐みの令」が施行され、側用人の柳沢吉保が将軍の寵愛を受け権勢を欲しいままにしていた時代である。藩主時代は参勤交代の免除の定府制により、江戸に住むことが多かった光圀が隠居の身となり、国許に帰ってまず驚いたのが「生類憐みの令」により人々が苦しんでいるという現実である。正義感が人一倍強い光圀はこの悪法を憎んだ。そして、元禄六年十二月、光圀はその犬の皮を送りつけたのである。光圀の真意をはかりかねた綱吉は光圀を江戸に呼び出した。諸大名に「大学」の講義をさせるという名目である。それが先に書いた光圀の江戸へいっていた理由である。

翌、元禄七年三月、登城した光圀は諸大名を前に「大学」の講義を始めた。「大学」の三綱の解説から始まり、十章の一節では「生類憐みの令」を批判した。誰もが内心困り果てた悪法を明快に批判した光圀には、さすがの綱吉や吉保も何も言えず無事に講義は終了した。

当山の種月和尚が光圀を訪ねたのは、そんな切迫した時だったのである。一般に光圀は領内二千ケ寺を廃するなど仏教を不遇にし儒家を尊んだと思われているが、実際は腐敗した寺を廃止、堕落した僧を還俗（げんぞく）させただけだ。その証拠に、八溝山日輪寺など古刹を修復したり、中国からの渡来僧信越禅師を水戸に迎えて祇園寺を開いたりもした。また大雄院の連山交易和尚と親交を重ねるなど、仏教や禅に対して深い理解を示しているのである。

種月師もそのような親交があったかどうか知るよしもないが、光圀公は当山でかなりゆっくりと時間を過ごされたようである。

前記の漢詩は次のようになる。

「ここ龍泰院はまちに遠くひっそりとしている。月居山が高くそびえて、秋天をつんざいている。しばらく足をとめて私も曹洞の教えに衣を洗い、袋田千丈の滝に足を洗って世俗の垢を落としたいものである。」

起句で山里にひっそりただずむ落ち着いた禅寺の様子、承句で正面に見える月居山をうたっている。転句では禅の宗風を詠みいれ、結句で滝に思いを寄せている。文才あふれる光圀ならではの素晴らしい七言絶句である。

月居山を眺めながらゆっくりとした時間を過ごされた光圀公は、種月師の詠んだ漢詩の韻に和して、さらに一首を

詠んだ

和種月師韻

偶扣把茅一草廬　人希燕雀押階除
東籬猶有傲霜菊　三径未荒停蝶車

「たまたま茅葺きの草堂を尋ねると、人かげもまれで小鳥たちが階段になれて遊んでいる。東の垣根にはまだ霜にも負けず、菊の花が咲き続け、庭の小道は荒れることなく整え、蝶が車を停めるように羽を休めている。

不正を憎み、正義を貫き、民衆からも親しまれた光圀公、片田舎にある草屋根の禅寺で小鳥が羽を休めるように心安らぐものを覚えたのであろう。当時の龍泰院を偲び、光圀公を慕いながら二首の漢詩を味わいたい。

（大子町在住）

北吉沢大草の氏神ー近津神社ー

飯村尋道

近津神社というと奥州近津三社（下野宮と八槻と棚倉）か、保内近津三社（下野宮と町付の中の宮と上野宮）を思い浮かべる。

北吉沢の大草の近津神社は、余り世間に知られていない。しかも写真のように鳥居も社殿も道路の下にあるので見落としてしまう。神社境内の近くに住む星野フミさんの話によると、「今の道は後に出来た。昔の道は神社の下の方にあった。川のへりをずーとガケッポの道になっていた。道は矢祭町内川にも通じていて平畑や宿の方からも高等科に通う子供たちが大勢歩いて来た」という。神社が道の下に祀られるのもおかしいと思ったが、星野さんの話で納得をした。

道を下に降りて石の鳥居をくぐると木造づくりの祠が六棟、横一列に並んでいる。左から十二所神社、次が月読神社、その次の祠は棟札もなく何様かわからない。そして中央のひとまわりおおきな祠が近津神社で、その右の二つの祠も棟札がなく何様なのかわからない。神官の佐々木さんは、「近津神社をはじめ他の境内末社無資格で、記録がないのでわからない」と話していた。

北吉沢大草の近津神社

銅板葺きの屋根に菊のご紋の入った社殿は高さが六尺（二㍍）程あり、御神体は金幣である。天保七年（一八六一）、嘉永元年（一八四八）、文久元年（一八三六）などの棟札によると、当時は近津大明神と呼称されていた。また棟札の記録から明治二十八年には氏子が十名（現在は十六・七人）いて、明治四十三年には、社殿の再建、昭和八年に屋根の銅板葺き替えをしている。祭主は天保の頃は中郷の龍宝院、以後上野宮の高梨さん、丹治さん、町付の菊池さん、槙野地の弓野さん、左貫佐々木さんと代わっている。

星野フミさんの話によると、「近津神社のお祭は十月二十七日（旧）、宿が家次回して槙野地のお別当さんを呼んでやった。昔は滝ノ上から下の人がみんな集まって賑やかにやった。今は神社に氏子が集まって御神酒上げをするだけ」になっている。

星野長男さんによると「神社は昔はもっと上、今の畑になっている辺りにあったのではないか」という人もいる。近所の人が畑近くの大きな杉を伐ったら山に届いたという。

銀杏が百年の上なのでそれ以前は上の畑辺りに鎮座していたのだろうか。もしそうだとしたら下に下りたのは棟札の記録から嘉永元年（一八四八）のことかもしれない。

（常陸大宮市在住）

消えた地名　残った地名

飯島満男

飯島さんとこは、弥左衛門新田といういい名称があったのに、なんで新川なんていう平凡な呼称なのかと聞かれて、はたと返答に窮したことがあった。拙宅の立地は、小貝川と牛久沼にはさまれ（その間、一キロ弱）、洪水時の緊急脱出用の舟が軒下に架かっているような状態だが、川らしい川はない。

弥左衛門新田は明治期の合併までの呼称で、九ケ村が合併した久賀村新川の名称が昭和の合併で藤代町新川、平成の合併で取手市新川となった。明治期に久賀村新川ができたのだが前述のように当地内には川はない。しかし、用水・悪水用の水路は大小合わせて数多く開削されている。それらの中で最大のものを古八間堀と称し、小貝川に通じている。この堀に江戸期の人々の自然との関わりが秘められていた。江戸初期、壮大な利根川東遷工事に着手した関東郡代伊奈忠次は父子四代、七十余年をかけてこの難工事を完成、小貝川、鬼怒川の流路を分離させる。これらの諸条件の整備と共に、小貝川流域の沼沢地帯と牛久沼南側の湿地の干拓も図る。まず牛久沼増水時、悪水の小貝川への排水路が寛永四年（一六二七）に開削された。八間巾の堀割りは当時の人々にとっては川に等しいものであり、今日の古八間堀、「新川」の誕生である。自然水の増減は人知の与り知らぬものがある。排水機能が働きすぎると、沼下流の人々に用水不足が生じ、逆に堀口を築き留めると沼水が溢れだし流域の干拓に支障をきたす。そのために築かれたのが沼南側の堤、通称二千間土手である。長さ二三三二間、寛永十一年に完成する。機能の衰えた堀、小貝川氾濫時の逆流による水害、土手の決潰等々、自然の脅威にさらされ、利害関係を巡って争いごとを繰り返す。紆余曲折を経て開削されたのが沼から小貝川への六国脇を流れる堀、新八間堀である。元禄十三年（一七〇〇）に完成する。これが、現称八間堀である。

また、古八間堀沿いに十六石（稗柄ともいう）という変わった地名がある。元禄郷帳に村高十六石とあるが故の呼称と思われるが、十六石の収穫しかない村の構成は今となっては、はかりしれない。現在は四世帯、龍ヶ崎市稗柄町として残る。

「宝暦七丁丑正月拾七日　水神宮　右馬丞新田　右馬之丞
弥左衛門新田　安左衛門　根新田　佐左衛門　大曲　治左衛門」と書かれた神札がある。宝暦七年（一七五七）から二五〇余年の重みを感じさせるお札で、現在はそれぞれ小林、飯島、小谷野、根本の姓を持つ子孫四家が回り持ちで神事を執行している。弥左衛門新田がいつ頃、如何なる手続きを経て認知されたかは承知しないが、飯島家初代と伝承されている墓碑に万治元年（一六五八）との刻字があるので、恐らくこの前後の頃と想定される。このように、水利事業の進展と共に小規模新田開発が盛んに行われたことがわかる。ちなみに元禄郷帳には根新田は無高、弥左衛門新田は石高四六三石五斗八升とある。

小貝川の三大堰は、福岡堰、岡堰、豊田堰である。福岡堰の前身は山田沼堰で、寛永二年に竣工、のちに下流の福岡に移された。弥左衛門新田は、福岡堰まで直線距離で約二〇キロ、堰の水利系列の最末端に位置する低地である。昭和三十年代でも、ちょっと長雨があると田中に悪水が流入し、刈り干した稲穂が芽生えてしまうほどであった。江戸、明治、大正期の農民の労苦は推して知るべしであろう。今でこそ数十ヘクタールにも及ぶ美田にU字溝の水路が縦横に走る沃野の最下端に極めつきの地名が残っている。その名は「永腐」という。「永遠の腐田」の意味であろうか。その名に内包される農民の苦しみ、報われない努力の悲しさ、いくばくかの収穫を期待しての執着心、希望等々の複雑な思いは、「百年に一度」の大不況に右往左往しているわれわれの比ではないにちがいない。

（取手市在住）

将来の里山づくりに
一歩踏み出すのならいま

桜庭　宏

三〇年も前のことですが、『写真集・大子町史』の制作は、大子町域を歩くことから始まった、と言ってもよいでしょう。景観調査と称しては町域を車で走り、歩き廻りました。助っ人として招かれた(?)私に、文字資料のみで地域を知ることの危うさを教えてくれたのがこの調査でした。

地域を歩く調査は、今は亡き益子公朋さんをリーダー格に、現在「遊史の会」会長の小澤圀彦さんと編さん事務局の方が説明役兼運転手となって続けられました。そのなかでも旧黒沢村の旅沢家を訪れ、森閑とした「山」のなかで、旅沢家の由来と山林経営をめぐる話をお聞きしたことを、今でも鮮明に記憶しています。その時の話と小澤さんたちが蒐集されていた経営資料などから、山林にかかわる伝承・技術と地域の在り様に関心を向けたのですが、『写真集』では無論のこと、『資料編』、『通史編』でも「かたち」にはできませんでした。

当時私は、自然と人間を対置するという枠組みに疑問を抱きながらも、自然を人間に都合のよいように利用する、あるいは自然を制する人間活動こそが歴史を担ってきた、という考え方から抜け切れずにいたのでした。

とはいえ、その後歴史研究から退いた私が、「山」にかかる生態系に関心を持ち、河畔林の再生や人工林跡地を自然林へ回復させる官民の協働作業にかかわることになるのも、あの景観調査で「山」との出会いがあったからです。

「ほない歴史通信」には、「山」にかかる生業や信仰などについての貴重な報告が載っていて、興味深く読ませていただきました。石井喜志夫さんが最新号で、「大子の森を守ろう」と主張されてますが、大子でも、自然の保全・再生といった活動が始まるのか、と期待がふくらみます。人間活動の諸結果が顕わとなったいまという時代、「自然を守る、環境保護」については誰もが口にするし強調もします。自然や環境を看板にして多くの催しが行なわれています。ただその多くは一過性であり、持続されることは少ないのが実情です。

大子町は、町民と協働で「自然と共生する豊かな」町づくりを進める「計画」とのこと。それだけに町民は、環境や自然にかかわる現場主義、調査と理論に裏づけられた活動と提言を、行政との協働のなかで果たしていく責任を担わなければならないでしょう。郷土樹種か否か判然としない売苗を用いるような植樹の催しに参加して、「今日は森の再生に善いことをした」といったような自己満足では済まされません。郷土樹種の採種から播種、育苗、そして地ごしらえ、植苗後の下草刈り、蔓切り、枝打ち、除伐、間伐などある時期まで継続して必要とされる作業に町民がかかわってこそ、森の再生と保全が達成されるのです。

「自然と共生」するには、まずこれまでの自然観を見直し、自然と人間を対置させるのではなく、ヒトである人間は自然の生態系の一部分であり、「自然のなかでの共存」しか途がないことを知るべきでしょう。

昨年、大子上空から、町面積の八割が森林面積であるという数字を実感しました。森林の内容には日本各地の森と同様の問題を抱えているようですが、森の再生と保全のために一歩踏み出す時です。ただ、「日本は森がこんなにもあるのに何で私たちの島で伐採するのか?」、と日本上空でパプアニューギニア人が呟いた、という話を忘れてはなりません。(北海道在住)

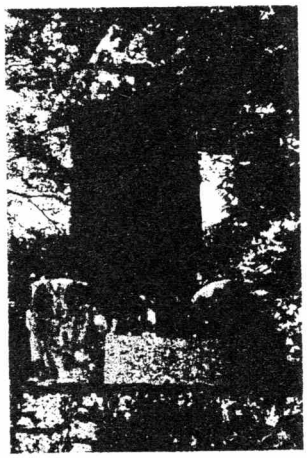
忠魂碑（一）～在郷軍人会と忠魂碑～

大子町の忠魂碑は、各行政地区（旧村）に建立されている。

忠魂碑は、日露戦争後、勇壮に戦い、戦病死した人たちをたたえ、祀るために建立されたものである。地区によっては、忠魂碑とあわせて忠霊塔（佐原・宮川地区）、忠魂塔（上小川）が建立されている。

日露戦争は、明治三十七年（一九〇四）から三十八年にかけて、日本が中国（清）の領土を主な戦場にして満州と朝鮮の支配権をめぐり、ロシアと戦った戦争である。明治三十七年日本は、世界最強の陸軍ロシアに宣戦布告した。日本は連戦連勝で進行し、旅順要塞を陥落させ、その勢いにのって二〇三高地から旅順港の艦艇を砲撃し、旅順港にとどまっているロシア艦隊を全滅させた。

日露戦争の最大の決戦は、明治三十八年三月の奉天開戦だった。この戦いで日本軍は、辛くも勝利をおさめることができた。同年五月には、ロシアのバルチック艦隊と日本の連合艦隊が対馬沖で激突し、バルチック艦隊は撃滅した。この戦いは日本軍の勝利であったから講和への気運が高まり、日本はアメリカ合衆国大統領セオドア・ルーズベルトの斡旋で講和条約を結び、樺太（サハリン）の南半分やロシアの軍事基地であった遼東半島の租借権を手に入れるとともに、旅順―長春間の鉄道権益を譲り受け、満州進出への足場を手に入れることができた。日露戦争は日本の勝利に終わったが多くの戦病死者を出した。大子地方で日露戦争に動員され、戦病死した人数は、佐原地区九人、黒沢地区一〇人、宮川地区七名、依上地区五人、大子地区六人、上小川地区五人、生瀬地区五人、袋田地区一名、下小川地区八名、計五十六名である。



上小川地区の忠魂之碑

忠魂碑は、戦病死者の英霊を供養し、祈願するだけでなく、戦争の拡大につれて戦闘意欲を鼓舞する上からも戦死者を人柱として碑に銘記することは、家族にとっても名誉なことであり、当時の国家体制から欠かすことはできなかった。

上小川地区では、明治三十七・八年の日露戦争に際し「挙村一致忠誠を竭し出征軍人の家族保護」に努めてきたので、戦病死者の英霊を祀るための忠魂碑は、日露戦後明治三十九年十月に大子地方の中では真っ先に建立されている。

日露戦争後。日本は欧米列強に対抗できる国内体制づくりを目指し、内務省を中心に地方改良運動が推進された。その運動の一環として在郷軍人会や青年団の育成がすすめられた。

明治四十三年十一月兵役を退いた民間人が組織する帝国在郷軍人会が陸軍の強力な指導のもとに結成された。在郷軍人会は各連隊区に支部を、各市町村に分会を組織した。

大子地方の在郷軍人会が設立に至った経過や組織、運営などについては資料を欠き、明らかにすることはできないが、生瀬村では明治三十九年（一九〇六）年三月、生瀬村軍友会（会長斎藤光）が設立された。大正三年（一九一四）には、軍友会を母体として生瀬村在郷軍人会が結成され、会長には佐川勇が選任された。会は入営者の予備教育や在郷軍人の訓練に力を入れるとともに、会の事業の一つとして忠魂碑の建立が計画された。生瀬地区の忠魂碑は、昭和三年（一九二八）四月帝国軍人会生瀬村分会が中心になって建立された。

（小　澤）

「千々乱風」の伝説を求めて

東海村村松白根遺跡の発掘調査から

飯島一生

大学を出てすぐに東海村の小学校の期間付き講師となった。夏の社会科研修会で常陸那珂港と海浜公園の造成工事を見に行った。案内してくれたのは、現在、那珂市の審議委員をされている仲田義一先生だった。予想以上の大規模な工事とともに、先生が話された「千々乱風」伝説が記憶に残った。「千々乱風」伝説が故佐藤次男先生のコメントとともに「いはらき」新聞に掲載されたのもこの頃だったと思う。

「千々乱風」伝説とは、江戸時代に現在の東海村からひたちなか市にかけての浜辺にあった村が砂嵐に見舞われ、砂に埋もれてしまった、という伝説である。

期せずして平成十五年四月から一年間、この伝説の地を発掘調査する事になった。場所は原研と新川の間の砂丘、約三万二千㎡である。県は過去にこの海岸線において海浜公園の造成等に伴い沢田遺跡を調査していた。そこでは江戸期の製塩跡や墓坑とともに陶器や人骨が確認されていたが、「千々乱風」伝説とはちょっと…というようなイメージがあった。当初は文字のない時代を掘ることだけに興味をもっていた自分にとって、全く興味の持てない現場であった。

現場は予想以上の広さで、ただの砂丘だ。試掘では、砂を三～五m除去しないと遺構が見えないという。本当にあるの？とはいえ、ローム層しか掘っていない自分には砂をどけていけば何がどういう状況で出てくるのか、遺構は崩れ、遺物は原位置を失う事にならないのか。考えると不安でいっぱいになった。

それでも、砂の除去をすすめると中世の遺物や人骨が少しずつ現れてきた。もしかしたら、村松白根遺跡こそが「千々乱風」伝説に言われる「砂に埋もれた村」か？村松白根遺跡を「村」としてとらえられるためには、家屋（火の痕跡）、トイレ、水場（井戸）、墓、道路等の遺構の確認、さらには食器等の日常雑器、工具、貨幣、玩具、あわよくば仏具等の遺物の確認が必要である。村の景観を想像しながら夢中で調査した。

調査が進むにつれ、海岸線には建物を伴う大規模な製塩跡が確認され、それに従事したであろう人々の建物跡や墓跡、畝状遺構等が次々に確認された。それに伴い土師質土器や中国製の磁器、瀬戸の陶器、硯、火打石や火打金、多量の古銭、石臼や茶臼等の遺物も相次いで確認されていった。まさに中世の「製塩の村」が砂の中にパックされていると確信を持ったのである。遺物から十五世紀から十六世紀にかけての集落であることもわかってきた。さらに「村」には大規模な土木工事により多量の黒土が運び込まれ、生活面を形成していることもわかった。

一方、岩城氏家臣の岡本家文書（一四九三年）によれば、佐竹の乱の際に村松にあった佐竹氏の塩竈を真崎氏が横領したとの記述がある。これらの状況から、佐竹氏と大いに関係していた「村」であることが想定できた。

最後に「村松虚空蔵堂所蔵文書」（一六二三年）には、「村松東方の海岸に住む百姓たちが砂嵐がひどいために村松大神宮領内へ移住願いをだし、その願いが聞き入れられた」との記述が見える。この記述は「千々乱風」伝説を物語るものなのだろうか。硯は見つけても、最後まで文字資料を確認することはできなかった。状況証拠では、かなり追いつめたが、確定することは難しい。またそこに発掘調査の魅力があるのだろう。いつの日か、また誰かが伝説に挑むことを楽しみに待っていようと思う。

（水戸市在住）

満蒙開拓大子分村と私の学校生活

清水延子

日本が五族（漢満蒙鮮日）協和を旗印に満州支配へと踏み出したのは昭和七年（一九三二）でした。この国策に沿って同十五年に北安省依安県大子分村第九次冷家店開拓団が誕生し、第一陣として奉仕隊十数名が渡満、同時に数家族が入植しました。

団員の子どもが入る国民学校の認可がおりたのは昭和十六年四月で生徒数は二十数名いたようです。校舎は完成するまで部落内の満人の使っていた作業小屋に手を入れて代用、教科書、文具類から衣服に至るまで団からの支給を受け、初代校長も着任、私の父清水勝男は奉仕隊で帰国の後、再び団に戻り教職につきました。

団員の住居は、日本がただ同然の値で接収した満人部落でしたから取りはずせるものは全て持ち去った後の廃屋。修理をしたといっても真冬は零下四〇度、時には六〇度にもなる世界、さらに夏の不快さは想像を絶するものでした。高い土壁に囲まれたスペースの内側は、人や馬、牛、豚、鶏、アヒル、犬などが飼われ、壁の外に一歩出ればオオカミや匪賊に襲われる危険があり、劣悪な環境でした。また、中国の大地は水不足のため風呂にもめったに入れず、汗や垢にまみれ、栄養状態も悪く大変なものでした。

昭和十六年に本部と第三部落が完成し、団の集落は四つになりました。同十七年九月下旬には職員住宅が完成し、父の招致により母と私と妹（二歳）は、下関から日本を後にしました。泰安街から馬車に乗って大子分村へ向かう夜の道が猛吹雪だったのを鮮明に憶えています。同年十月に総赤煉瓦造りの新校舎が完成、四教室、事務室、ペチカ暖房をもつ立派な校舎です。

昭和十八年春、私は一年生に入学しました。北満には四季がなく、雪解けと同時に万物が皆一斉に芽を出し花開く夏が来ます。一年生はもう立派な働き手です。畑の畝は一キロほどあり、途中で休んで「スカンボ」を食べたりしました。野菜の収穫時には、馬車の後押しをしながら作物を引き抜き、作物の泥を服でおとし、だれもが丸かじりです。人参をはじめ、淡いピンク色のじゃがいもはジューシーで甘みがありました。

冬は凍結で凸凹した校庭、畑とも、野原とも区別のつかない白い世界です。時折ノロ鹿の群れが数十頭走り去るぐらいで、静寂そのものです。教室では興安嶺で切り出された白樺の薪を燃やし、暖をとりました。学習の合間には衣服についた虱とりです。赤く焼けたストーブの上でパチパチとよくはぜました。頭をかくと頭虱がノートの上に落ちることもありました。授業は二学級複式編成で西安から着任してきた松田校長が下学年、私の父清水教諭が上学年の担当でした。先生方は時には床屋に変身して、切れの悪いバリカンや鋏で児童の髪の毛を刈ってくれます。児童が「イタイ！」と叫んでも容赦のない床屋さんでした。

昭和十九年頃には、開拓団の生産も増大し、共同経営から個人経営に移り、やっと団員に明るい夢と希望が見え始めた時でした。二十年の夏に入ると、全校生徒（三〇名弱）は、校庭に身を隠すタコ壺を掘ったり、手榴弾の投げ方の訓練等が日々の授業になりました。八月九日、満州へのソ連の進入、十五日敗戦、それから一年余りの逃避行生活が始まりました。多くの犠牲者をだし生き残ったもの達が故国・佐世保港にたどりつきました。平成七年、かつての団員十数名で念願の墓参をしました。あの日から五十年、校舎のあった小高い丘は広い大豆畑になり、畝間には赤い煉瓦づくりの校舎の破片がたくさん散乱しており、当時の学校生活が偲ばれました。

（大子町在住）

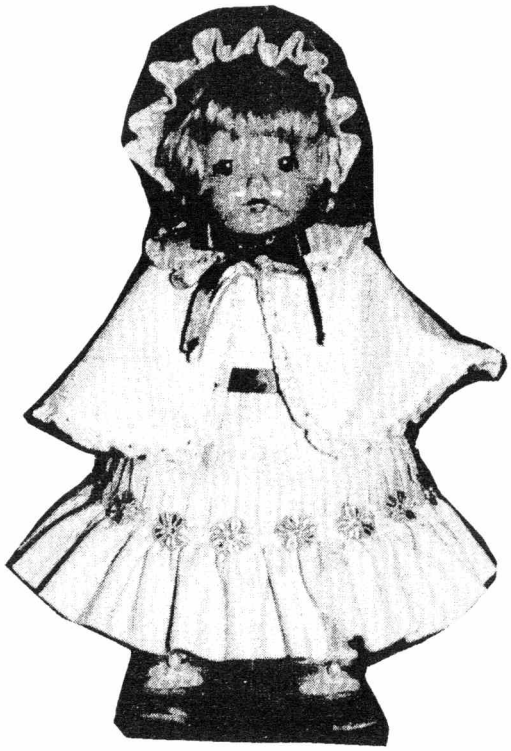
日米親善大使メリー人形と私とのかかわり

菊池博子

メリー人形は昭和二年（一九二七）、日米親善大使としてアメリカより日本に贈られた人形です。かつて日本の宣教師をしていたシドニー・ギュリック博士が「世界平和は子供から」というスローガンをかかげ全州から一万二七三九体を集めて、日本全国の小学校と幼稚園に贈ったのです。その一体が、旧黒澤村立尋常小学校に贈られ、現在に至るまで八二年を経過しています。黒澤尋常小学校では、昭和二年四月三十日にメリー人形の歓迎会を村を挙げて盛大に行いました。その貴重な写真が今も残されております。

私が初めて教師として赴任したのは昭和十六年四月でした。その頃は珍しいモダンな可愛らしい人形がロッカーに飾られており、子供たちの憧れでした。

それから間もなく、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発しました。戦争は激しさを増し、「アメリカに関する一切のものを排除せよ」との命令が出されました。特に親善人形はスパイ人形として一番先に目の仇とされ、踏みつぶされたり、叩かれたり、焼却されました。黒澤小学校も例外なくすべてを焼き捨てざるを得ませんでした。



人形の焼却を任された私は図書館に持って行き、燃すことを決心してケースより取り出しました。するとその時一枚の葉書大の写真がひらりと落ちました。何だろうとよく見ると、港らしい場所での人形の贈呈式、裏には日米親善大使メリーと書いてありました。私は、こんな意義深い人形を燃すわけにはいかないと心が変わりました。「そうだ、この写真だけを燃やして人形を助けることにしよう」と思いました。写真を燃やし、人形を焼却したと嘘の報告をしました。人目の付かないところに匿まおうと図書戸棚の隅、一番下へ、本で囲いケースのまま隠しました。絶対に見つからないようにと思いを込めました。でも、万一見つかったらどうしようと後髪を引かれる思いでした。

時は流れて昭和二十年八月十五日、太平洋戦争は終戦を迎えました。早くメリーを取り出さねばと、はやる気持ちを抑え、人心が落ち着いた五年後の日本独立を機に、こっそり人形を暗い図書室から取り出しました。私の脳裏には、いつも、人知れぬ罪悪感を感じていましたが、その時には、やっと、解放感に満たされた思いでいっぱいでした。

取り出した時のメリーの服はボロボロにスムシに喰われ、せつない思いでした。他の先生が赤い可愛い服を着せてくれましたが、昨年、当時の服に着せ替えてあげました。立派に八〇年前の姿になり、一安心いたしました。昨年、茨城県から贈られた筑波かすみの里帰りの時に、メリーの写真と黒澤小学校長が保管していた友情の絆の文章を色紙に書いていただき、アメリカの博物館の方に渡しました。私は、メリー人形の写真が里帰りできたと喜んでいます。現在日本では二四三体、茨城県では八体が残っています。昨年、メリー人形と筑波かすみが大子町の街角美術館に飾られ多くの人で賑わいました。（大子町在住）

七十三歳戦争の頃を憶う

江田七男

私が生まれたのは昭和十年（一九三五）六月、所は現在の役場の南側を流れる押川の中流で、初原川と合流する近くの大字山田字野出畑。押川の東側は大字上岡で、田んぼの広がる、いわば穀倉地帯と言えるところ。私の出生地の方の西側、特に野出畑という所は地名の通りで、押川の高さよりも四、五十メートル急に高い位置にあって、田畑の耕作にはその急な坂道下り上りしなければならなかった。

山田に満蒙開拓団の指導者的な人が居た。移民を積極的に奨励した方で、満州には引率して行った。この人が山田地区の耕地整理の指導もした。毎朝、我が家まで聞こえる掛声があった。イヤサカー（弥栄）という掛声は満蒙開拓地での掛声だったことを聞いた。私が国民学校三年生の頃だった様に記憶する。

私の家の環境は家を一歩踏み出せば、畑・山・川と言ったところで、更に農家の物不足の中では、動物とあまり変わらない生活だった。馬に至っては家族の扱いで一軒の家の中に同居していたものだった。

昭和十六年四月、これまで尋常小学校だった学校は、私達の入学を期して戦時体制への即応と皇国民の基本的錬成を目的とした国民学校に衣替えした。国語は、「サイタサイタ　サクラガサイタ」が「ススメ　ススメ　ヘイタイサンススメ」に変わってしまった。

昭和十六年十二月八日、日本海軍航空隊の真珠湾攻撃により、大東亜戦争が勃発した。このことで忘れようとしても忘れられないのが、この戦争の始まった日を大詔奉戴日として、各学校では登校前に神社参拝をすることになったことだ。この頃の寒さは、温暖化の様相全くなく、一年生には身に浸みて、その度毎に寒さに震え泣きながら帰ったことは忘れられない。

私は国民学校一年生の十二月から四年生の八月までが戦時下であった。この頃は、物資の不足が不自由なくらいで、私達小学生は農家の手伝いをして、野山を駆け、川に遊んでいれば喜ばれる頃で、戦争中との意識はそれ程なかった様に記憶する。

しかし、終戦直前の七月十八日午後二時十五分、空襲警報のサイレンの後、飛行機の爆音と共に機銃掃射の音が聞こえた。大子駅の空襲である。この時、軍隊に行っていた兄が、父の病気の為に一時帰省していたが，その兄の号令で、家の中に古くから掘ってあった貯蔵所に入れられてしまったので、空襲の状態を見る事はできなかった。でも、この時ばかりは戦争の恐ろしさを知った気がした。八月十五日、父が「今日は天皇陛下の放送がある」と朝から言っていた。私の家に良く聞こえないが、どうにか聞きとれるラジオがあったので、野出畑坪の内から四、五人と我が家のものが集まって聞いた。四年生では何を言っているのか分かる話ではない。父も鮮明ではなかったようだが、「日本は負けたんだな」と、ぼそっと言ったのを思い出す。

これ迄の学校の帰途、同級生三人で帰る途中、小さな声で「日本は負けるな」と誰かが言うと、他の二人も同調したのを思いだす。日本人の誰もが勝てる戦争とは思っては居なかった様子。

この敗戦を機として、これまでの大東亜戦争よりも苦しい生活が始まる。食料戦争と言っても過言でないと思うが、この食料戦争も徐々にではあるが、食糧増産の掛声は大きくなって、敗戦の精神的な痛手も回復も目に見えて来た。それまで学校の運動場は畑となって薩摩芋等が作られていたが、私が五年生の頃には運動会が盛大にできる運動場となり、夏には盆踊りが盛んに行われた。警報のサイレンのない日が、私が十歳の時から七十三歳の今迄続く。現今のニュースでは、テロで何百人も亡くなり、戦争で何千何万の人が亡くなることを伝え聞くと、日本人の戦後の聡明さに気付くところである。（福島県塙町在住）

川下の渡し

大森政夫

通称川下の渡船場は、大子町頃藤川下坪にあって、同坪と対岸の館坪を結ぶ久慈川の渡船場であった。

川下の渡船場の成立はいつの頃か定かではないが、この渡船場の存在を知るうえで参考になる二つの史料がある。いずれも江戸末期に著されたもので、一つは「水府志料」（小宮山楓軒編纂）である。この志料の大子組頃藤村の項に、

舟二ツ　其一は館の渡と云。其次は横石の渡と云。何れもくり舟なり。水戸より保内への通路なり。

河岸　米穀其外運漕なす。山方村河岸へ四里餘、部垂村高和田河岸迄七里といへり（後略）

とある。他の一つは、加藤寛斎随筆「常陸国北郡里程間数之記」である。この図の頃藤村川下坪に「河岸」の記載が、また横石坪には「舟渡」の記載が見られ、いずれも久慈川にかかる渡船場であった。同図では、川下渡船場を「河岸」とし、横石坪の場合は「舟渡」と使い分けて記録されている。このことは、川下の「河岸」は久慈川舟運や南郷街道に接していて、果たす機能も大きかったことを意味するものと思料される。

さて、川下坪で長年区長を務められた小磯甲造さん（九十九歳）に川下渡船のことをうかがってみた。

当時川下の渡船場には、親船と小船の二艘があった。親船は、馬が三頭と馬方等が乗れる規模のものであった。船頭さんは一人で、ほとんど無休で昼夜を問わず「おおい…」と声をかけると、渡船してくれることになっていた。渡船を利用するのは地元の人達が多く、田畑が対岸の館坪にあることもあって日常の農作業に使う農耕馬を乗船させて行き来したり、収穫物の搬送に利用した。また、館坪関戸神社の祭礼時には神輿の渡御及び関係する大勢の人達が乗船するなど、土地の人や時には他地域の人達の貴重な日常の足として多方面に活用され、なくてはならない存在であった。

渡船場の運営は、川下坪の人達によって維持管理された。船頭さんは坪内から依頼し、川岸近くに常駐した。維持管理に必要な生活費や諸経費には、坪内の各家庭から米や麦を出し合い、また他地域の利用者からは渡船利用料金を徴し、これらを合わせて充当した。ちなみに、昭和三十年頃の渡船利用料金は、当時の子どもの小遣いに匹敵する一回十円であった。

「船頭さんの交代があって、後任の船頭さんが見つかるまで、川下坪の人達が順番で船頭役を務めたこともあった」、と小磯さんは語った。

船をあやつるために必要な用具は、主に発着時に使う竿と両岸を結ぶ鉄線（以前は、蔦やロープを使っていたという）。船頭さんは船の端に乗り、鉄線を手繰りながら船を対岸に寄せていくのであった。

昭和三十九年に至って川下の渡船場は一時廃止になったが、翌四十年三月、渡船場の必要性から町で管理運営をすることになった。運営に当たっては、船を新調したり渡船時間を定めるなど、すべて町の業務管理のもとで再開始された。

こうして、長い間地域住民の利便に供してきた渡船場であったが、社会環境の変化とともにその需要が次第になくなり、川下の渡船場は昭和五十九年になって事実上廃止となった。廃止に当たっては、最後の船頭さんとして神長清松さんへ町から感謝状が贈られた。昭和五十九年九月のことであった。今は、昔日の面影はない。

（大子町在住）

昭和時代の奥久慈茶業の変遷

吉成俊光

「歴史は繰り返す」。二〇〇八年秋、米国発の国際金融危機が世界に瞬く間に波及し、今、世界は同時不況に突入した。過去にそうであったように、今度も次世代の技術革新を生み、新たな時代を切り開く転機となるであろうか。今度は、昭和時代の奥久慈茶業の変遷について、年代別に振り返って見たい。

（一）昭和の初めから終戦まで（世界恐慌・不況・戦時下）

明治四十年頃から茶は安定した換金作物（佐原村では栽培面積五〇町歩、製茶五千貫）であったが、一九二九年の世界恐慌、大不況で物価下落、茶価下落した。経済低迷下の昭和七年（一九三二）、佐原村は経済更正樹立村の指定を受け、茶業の振興にも取り組むが、昭和十五年以降、戦時体制となり、食糧増産のため茶園は普通畑へ転換されて、茶は減産となる。

（二）昭和二十年代（統制経済から自由経済へ、戦後復興期）

復員軍人等の帰村により、農業労働人口が増加する。二十年代前半に再び手揉み茶の全盛期をむかえた。栽培面積、生産量が増加して製茶機械を本格的に導入する。茶業振興に向けて昭和二十三年に佐原村茶業組合を設立する。

（三）昭和三十年代（高度経済成長期、機械製茶の時代へ）

機械製茶が進展する。製茶機が技術革新（ベルト掛けからモーター直結型へ）され、燃料が変革（薪・石炭から重油へ、木炭がLPガスへ）する。省力化と安定した量産加工、品質向上がはかられる。昭和三十一年、合併大子町一円を対象に保内郷茶業組合が設立、昭和三十六年には奥久慈茶業組合と名称を改称する。優良品種やぶきたを導入し、茶苗木の挿木繁殖法が普及する。昭和三十二年に県山間地帯特産指導所が設置されて、品種改良、栽培製茶技術の向上普及をはかった。

（四）昭和四十年代（茶業拡張期、質の良さを誇る奥久慈茶）

やぶきた種への改植造園が進展し、畦畔茶をのぞき在来茶園が減少する。自家園自家製自家販売の茶業が主流であった。品種化率が六割、百ヘクタールを超す。荒茶工場数は六五。昭和四十二年に奥久慈茶業組合が冷蔵庫を建設、昭和四十六年には茨城県茶生産者組合連合会が創立。昭和四十八年、第二回関東ブロック茶共進会を大子町で開催すると、茨城の奥久慈茶の名声が上がったが、流通販売面では産地間競争が激しくなる。

（五）昭和五十年代（気象災害とその対策について）

昭和五十四年に凍霜害、昭和五十九年に大干寒害で県下生産量も三割に落ち込む。昭和六十三年に凍霜害にあう。これらは北限の茶産地の宿命ではあるが、やぶきた種茶園や低平地茶園の被害が大であった。対策として、棚式カンレーシャ、トンネル被覆や不良茶園の整理をすすめた。

（六）昭和六十年代から平成の奥久慈茶

県補助事業で防霜ファン設備が充実する。ハサミ茶園が主流となり、手摘みは極上品茶のみとなる。製茶機械が大型化し、自動化、動力機械摘採が普及する。摘採が短期集中し日産生葉が増加、製茶加工処理能力が増強される。平成七年には奥久慈茶の里公園が開園する。茶のテーマパークで地域振興を図る。平成になると、日本の茶業は緑茶ドリンク市場が約五千億円と急速に拡大した反面、急須で淹れるリーフ市場が低迷する。生産面でも、乗用型摘採機、大型自動製茶機械設備、大規模共同工場、茶農協など大量生産方式が主体となり、個人や小規模山間地茶業は淘汰されようとしている。山間小規模の奥久慈茶業も担い手の高齢化、後継者不足が課題となっている。

「帰りなんいざ　田園将に蕪れんとす」（陶淵明）。不況を転機に、過疎地、農林業を再生できるだろうか。私達は自然や環境重視の社会を構築できるだろうか。時代の人オバマ大統領の登場は新しい歴史の扉を開こうとしている。（大子町在住）

【資料紹介】大正十年「保内郷の人物」について

大正九年（一九二〇）原敬政友会内閣で水郡線の敷設が承認され、第一期線で大正十一年十二月十日に山方駅が開通、第二期線で大正十四年八月十五日に上小川駅が開通、第三期線で昭和二年三月十日に大子駅が開通する。この水郡線開通を目指して地元の政友会派は根本正衆議院議員を応援する。そのころの大正十年九月十五日の『イハラキ時事』第六巻第九号には、「保内郷の人物」として、次のように記載されている。

益子彦五郎　大子町の名門にして町政を採ること三十余年、後半生を地方開発の為めに投ぜり、齢古希に達つるも倦まず、就中水郡鉄道、農学校、其他幾多の問題に功績永遠に伝ふべきものあり。

後藤安介　教育方針に於て特に注目に値すべく教材の地方化にして教授法も実験的なり、克く部下を統一し信用多大なり。

外池太一郎　其先は近江の裔なり、呉服肥料塩元売捌量器等を販売し醤油の醸造元なり、下野武茂郷には数百町歩に渉る田面を有す、営業益々盛大公共的事業に尽せり。所得税調査委員、町会区会議員、大子銀行取締役、消防組頭たり。

川口利吉　壮年時代より八溝の山林を買入れ植林し、地方物産楮蒟蒻の仲買をなし、其名顕はる。現に地方森林会議員、帝国森林会議員、常陸製糸の相談役なり。

松浦栄次郎　大子町一流の資産家にして、現に町会議員として衆望をあつめ居れり、楮蒟蒻問屋として巨万の富を有せり。

樋口政次郎　日露の役に殊勲あり、金物肥料雑貨を販売し、尚ほ運送及自動車営業をなし地方に信用を有する、消防役員としてはまことに適材なり。

樋口佐平　大子呉服店の数ある中に店舗の装飾に苦心して目を惹ける又時代に適当せる品柄を選べる当店の特色なり、堅実なる行動は販路の拡張をなし遜色なき営業振りなり。

小崎儀平　夙に清酒醸造家として先代より四隣に聞ゆ、学務委員消防組役員たり。

石井栄次郎　共立大子病院長として名あり、町医、袋田村医を兼ね地方圭家の元老なり、外科手術及腎臓病に関する治療は特色を有し患者信用多大なり。

樋口寛三　千葉医専の名医にして大正四年開業最新式の技術家にして克く諸般の研究をなせり。

船山梅太郎　内外科を以て知らる大学別科出身なり、令息勤は東北医専の出身にて患者に信用甚大なり。

菊池信太郎　水中出身関西学院に遊び財政経済を修め保内郷に於ける英材なり、水戸市三宅健寿の実兄なり。

岡田惣七郎　宮川村の大資産家に生まれ人格円満人材を抱擁するに妙なり、八溝川水力を利用し製材及精米事業を営めり。

菊池一也　川山の酒屋として近郷知らぬものなし、長子栄水中の出、父君を輔けて家業に従事し銘酒白菊は好評噴々たり。

松本長次郎　多年村治に尽くし好助役として名あり、病を得て職を辞せるは同村に取りて遺憾なり。

また、『奥久慈膝くりげ』は根本正を応援した人物として、「大子町の益子彦五郎、石井栄次郎、外池重次郎、同太一郎、野内熊三、黒崎久則、川口利吉（明治十五、六年ごろ越後から来る）、川口利作、阿久津寛之助、大藤伝之介、松浦栄次郎、小崎儀平、益子善次衛門、成井ます、佐原村の神永秀介、宮川村の菊池信太郎、岡田惣七、斎藤勇之介、袋田村の桜岡力、野内金五郎、上小川村の宮田篤三郎、神賀正修、下小川村の神長道之介、生瀬村の石井善蔵」らを挙げている。

こうして、昭和二年の水郡線開通により、大子駅を中心に新しい商店街が形成される。大子駅は、保内郷地方の物資の集散地として大きく発展していくのである。

（野内）

【昭和の初め頃の農家　八】　冬の仕事　木の葉さらい

秋の取り入れが終わると農家の仕事も一段落して、冬に備える仕事にかかる。

落ち葉をさらって蓄えるのも大事な冬の仕事だ。落ち葉は馬小屋の敷き藁に利用する事が最も多い。これはやがて堆肥になるので農家にとっては大事なものだ。そのほか温床の発熱材としても利用する。周りを藁などで囲って、中に落ち葉を敷き詰め水をかけて踏み固めて置くとやがて発酵が始まる。その上には土を載せここに種を蒔いて油紙やビニールで覆っておく。まだ寒い時期でも落ち葉の発酵による熱で発芽するので、露地よりも早く苗が出来る。ナス、キュウリなどの促成栽培や煙草の苗作りなどに利用される。

殆どの農家がお正月（旧暦だったから二月頃）の前に終わらせようと毎日のように山に登り木の葉さらいをした。

木の葉さらいの方法は、先ず山の落ち葉を「くまで」という道具でかき集める。多くは傾斜地だから山の上の方から下に向かって掃きおろして出来るだけ下の方へ集める。今度は直径深さ共に一・二～一・五メートルくらいの木の葉籠に詰める。その上に更に籠の高さの二～三倍くらいに積み上げるのだ。これはなかなか難しい技術を要する。

まず木の葉の詰まった籠を寝せて菰を敷き、その上に木の葉をしっかりと押し詰めるように重ねて積み上げる。その上にも菰を被せ、籠に棒を通して籠に着いている綱でしっかりと結わえ付ける。木の葉の詰め方が緩かったり綱の結わえ方が緩かったりすると、木の葉が崩れてしまう。用意が出来ると籠を起こして背負う。重さはさほどではないが、背負っている人の三倍くらいの高さになるから、途中の木の枝にひっかかったり坂道で転んだりすることもある。

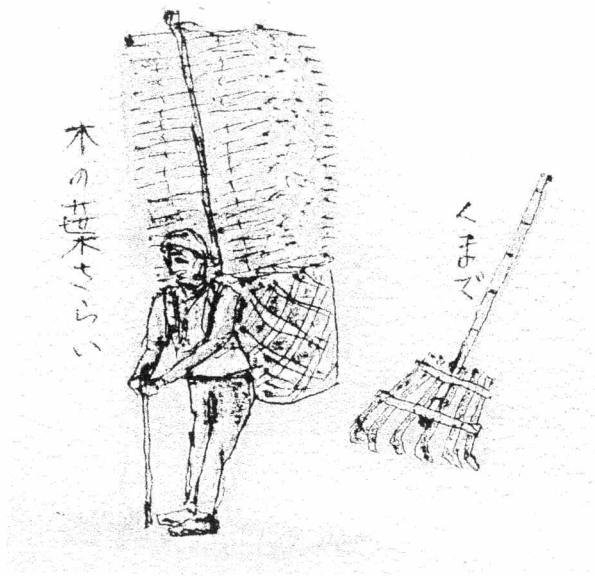
こうして家まで運んで木の葉小屋に入れておく。木の葉小屋と言っても普通は周りを篠などで囲み屋根もない所が多い。

冬の天気のよい時期を選んで毎日のように木の葉さらいをやって、木の葉小屋一杯にする。春になって草が伸びるまでの間馬小屋の敷き藁にするのでかなりの量が必要なのだ。

雪が降ると出来ないし、雨が降っても木の葉が重くて容易ではない。だが、少し木の葉がしめっていた方が積み重ねるのには木の葉が崩れにくくて都合がよいのだ。

地方によって方法に違いがあるが、この地方では以上のような方法だった。最近ではネットの袋に木の葉を詰める方法が多い。これは簡単だし取り扱いも楽なので普及している。

今は木の葉を農業に使う事が少ないので、木の葉さらいをする風景はほとんど見られなくなってしまった。（石井）



新聞記事にみる満州移民の断片（二）

―第九次冷家店大子町開拓団の軌跡―

茨城県の満州分村計画協議会の構成員でもない大子町で、いち早く同町経済更生委員会が満州分村計画を決定したのは昭和十四年十一月三日のことであった。その約一ヶ月後の十二月九日付「いはらき」新聞（以下、紙名は略）は、分村移民の茨城県への割当が三百名に内定したと伝えたうえで、この割当三百名のほかに「大子町分村移民団の三百名を加へて、六百名を送出する肚」であり、『人間飢饉』の前に暗影を投じてゐた大陸国策も本県のみは、十五年度は順風に帆の滑らかさを以て行くものと観測されてゐる」と述べている。このように、大子町の分村移民決定はあくまでも枠外に位置していた。ところが、どのような経緯があったのか不明だが、同月十二日の拓務省からの関係地方長官宛通牒では、茨城県の割当は大子町の分三百戸だけとなっている（十四年十二月十三日付）。大子町が、いわば主役に躍り出たといってよいだろう。

早速、分村移民のための準備が開始される。三百戸といっても、一時に入植するわけではない。先遣隊員が選ばれ、彼らは団長や指導員とともに一年ほど前に入植し、営農や住宅の準備など受け入れ体制を整える任務に当たった。大子町の場合、この先遣隊員がどのような方法で選ばれたのか詳らかでないが、ともあれ三十二名の隊員は十二月十三日に大子駅を出発し、東茨城郡長岡村（現茨城町）にある農民道場に入った。

農民道場とは、農山漁村経済更生運動を推進するために農村中堅人物を養成する場として設けられたものである。中堅人物養成施設の指定県となった茨城県は、長岡村に土地を求めて昭和九年十二月に茨城農民道場を開設した。ここでの教育は、学科よりも実践的な開墾、農耕を主眼とし、皇道精神を中心とする勤労教育を施すことを特徴としていた。十一年八月に「二十ヶ年百万戸送出計画」が公表され、満州移民が国策として本格的に展開されるようになると、この道場は、農業移民のための訓練の場ともなっていく。翌十二年二月、第六次三江省湯原茨城村先遣隊の訓練が最初のケースであった（茨城町史 通史編）。かくして、大子町の先遣隊員も、約一ヶ月間に及ぶ厳しい拓務訓練を受けることになったのである

農民道場に一行を引率したのが菊池正修である。菊池は「大子町単村分村運動の先駆者」（大子町史資料編 下巻）かつ「首唱者」（昭和十四年十二月十四日付）であり、分村移民に深く関わった人物であるが、その菊池も、別途移民団長としての訓練を受けていた。開拓団の幹部の訓練は、昭和十一年度から内原の日本国民高等学校敷地内に設けられた満州移民指導者訓練所で始まったが、十四年二月には拓務省の手によって鯉淵村に満蒙開拓幹部訓練所が新設された。所長は、加藤完治が兼務していた。十四年度には一二六八名が入所したが、菊池はその一人であった（満州開拓と青少年義勇軍―創設と訓練―）。

訓練を終えた菊池は、昭和十四年十二月二十六日に大子駅を発ち、一足早く渡満の途に着いた。他方、先遣隊員も翌十五年一月八日に訓練を終えていったん大子町に戻り、身辺の整理に当たった。十七日には町内の十二所神社で壮行祈願祭が、また役場では壮行会が町長や町会議員らの出席のもとで開かれた。渡満した先遣隊員が何人だったのかは現在のところ確認できないが、翌十八日、一行は大子駅発上り列車で郷里を後にした。記事は、隊員の声を次のように伝えている。「渡満の上は北満の礎石となるつもりで頑張り、大子町北満分村の達成と国策に努力します」、と（十五年一月十九日付）。

分村移民の舞台は、こうして満州へと移ることになる。（齋藤）

イメージアップした袋田の滝新観瀑台

（鈴木　徹）

大子町を代表する観光地であります袋田の滝に、昨年九月十三日に新観瀑台がオープンしました。オープン以降、平成十九年度と比較すると平成二十一年一月末現在で、約二十四万人増の観光客が訪れました。特に、昨年の十一月二十三日は、那珂ＩＣから袋田まで道路が終日渋滞しまして、まさに新観瀑台効果というところです。

昨年は、首都圏の旅行代理店等を訪問しての観光宣伝。さらにテレビ、新聞、情報誌等にも数多く取り上げられ、大子町、そして袋田の滝新観瀑台オープンの宣伝に努めてきました。

また、昨年十月、十一月には六日間に亘り、袋田の滝周辺で約二千人の観光客の動向調査を行いました。その結果、観光客の主体は茨城県、そして千葉県、埼玉県、東京都からのお客様です。意外なのは隣接県である福島県、栃木県からの観光客が少ないことが分かりました。この調査を参考に、二月には、春の観光宣伝に栃木方面の関係機関を訪問しました。新観瀑台オープンの情報は予想以上に知られていないのが実情でありますので、今後まだまだ伸びる可能性があります。

今年は、観光ボランティアガイド育成事業の開催や地域の観光資源の発掘に努め、さらなる大子町観光の魅力アップを図りたいと考えております。

観光客を主体とした交流人口が十万人ある場合は、定住人口六千人の経済効果があるとの試算もあります。観光振興は大子町経済に少なからず影響があるものと推測され、不況で地域経済は混迷していますが、新観瀑台効果で少しでも吹き飛ばして欲しいと願うばかりです。

編集後記

はやいもので「ほない通信」が発刊されて今回で五十号となりました。記念号と言うことで編集人の先生方と相談し、基本的に読者の方に寄稿していただきそれを掲載するものとし、内容と題目等は指定せず自由に書いていただき、それを載せていこうということになりました。今回の執筆にあたりましては、つぎの方々から玉稿をお寄せいただきたいへんお世話になりました。

櫻岡滋弥氏、出村尚英氏、飯島一生氏、高橋修氏
江田七男氏、吉成俊光氏、大森政夫氏、吉成英文氏
飯村尋道氏、清水延子氏、菊池博子氏、安藤政蔵氏
飯島満男氏、桜庭宏氏　鈴木　徹氏

（順不同）

紙面をお借りして感謝申し上げます。お陰様で充実した編集ができました。今後ともこれらを参考に、歴史探求に努力する所存であります。

（佐藤治身）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立日立商業高校）
石井喜志夫（元　教　員）
小澤　圀彦（元　教　員）
佐藤治身（大子町教育委員会）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六九番地
〒319-3551　☎0295（72）2627